『光と空間の詩人』と呼ばれた男 František Trösterについて

堀 田 充 規

はじめに

世界中の舞台美術家が集うプラハ・カドリエンナーレ（通称PQ）の開催を巡る調査を行った中で、20世紀の巨匠Josef Svoboda（ヨセフ・スヴォボダ1920～2002）がキーパーソンであることは紀要＜芸術＞24でも述べた通りだ。近代演劇を学んだ者ならヨセフ・スヴォボダの名を知る者も多く、彼が創作した舞台美術はネット上で容易に見ることができる昨今だ。だが、天才的な舞台美術家が突然登場した訳ではなかった。ファインアートと違い、舞台芸術は一人で生み出される芸術ではなく、劇場や演出家やプロデューサーなど多くの要素が揃わなければ上演出来ない。スヴォボダが登場するにはその下地が養われていなければならなかったはずだ。それを探っているうちにスヴォボダが師事した人物、František Tröster（フランティシェク・トロスター1904～1968）に行き着いた。チェコ共和国の重鎮トロスターに焦点を当て、その活動と功績を調査し考察する。

（調査した中で数々の人名や地名が登場するが、すでに日本語発音の表示されている人物や地名は日本語発音で表示する。例えばスヴォボダ、それ以外の多くの人名はアルファベット表示する事とした。）

フランティシェク・トロスターとは何者か?

20世紀の演劇史に華々しく名を残すスヴォボダが師事した人物の一人がトロスターだった。彼の経歴を調べてみた。

※写真1　フランティシェク・トロスター

◇トロスターの経歴　1904～1968（※上記写真1）

1904年12月20日　Vrbicny生まれ。（ボヘミア地方、当時はオーストリア・ハンガリー帝国1867～1918）

1916～1924年　リアルスクールで学ぶ。（1918年チェコスロバキア共和国独立）

1920～1924年　学生時代にRoudnice（ボヘミア地方にある地名）のアマチュア演劇・シアターギルド・ハーレクのための舞台美術をデザインし始める。

1924年　Roudnice高校教員の資格免許を得る。

1924～28年　チェコ工科大学で建築と技術を学ぶ。

Rudolf Kříženecký 教授に師事。

1928～31年　プラハの産業芸術学部で教授パベル・ヤナークに師事、大学院で建築と土木工学を研究。在学中に風刺雑誌 Trn でイラストを描く。スタディツアーでフランス・デンマーク・スウェーデン・ドイツなどに渡航。

都市プランナーとして建設会社に勤務、ル・コルビジェのアルジェ・プロジェクトに参加、アルジェに留任。アルジェリアの古典建築、イスラムの都市知識を得る。

1934年　帰国後、ブルノ州立工業学校の非常勤講師を勤める。

1934～38年　ブラチスラバの学校の装飾芸術部門、研究科外部講師に就任。

同時にスロバキア国立劇場の仕事に関わる。演出家 F・Langer や Viktorem Šulcem（1897～1945）とのコラボレーションを始める。

1935年　演出家 Jiřím Frejkou（1904～1952）とのゴールデンコンビによる舞台創作が始まる。

ミラノ国際展に参加、グランプリ受賞。

パリ万博に参加、ゴールドメダルを受賞。

1938年　プラハへ移住。プラハのアートフォーラムでステージデザイン展覧会を開く。

一時的に演出家 Jiřím Frejkou との破局。

1939年　プラハ・セントラルスクール、住宅産業科教授～43年まで勤める。

1940年　フランシス・ツァー（1902～1971）とチャールズ・Jernek らとプラハの国民劇場での舞台創作が始まる。ミラノ・トリエンナーレで二つのゴールドメダルを獲得。

1943年～　プラハ州立音楽院・ドラマ部門でステージデザインを教え始める。（これは後の DAMU ※に繋がる）

1944年　演出家 Jiřím Frejkou との新たなコラボレーション開始。しかし、ナチス占領下のもと彼のデザイン理論は反ファシズム的と捉えられ、芸術活動を禁止された。軍需産業に配備され強制労働を強いられる。

1945年　演出家 Jiřím Frejkou やアルフレッド・ラドック（1914～1976）、Jaromírem Pleskotem（1922～2009）らとパフォーミングアーツの学科設立に貢献 し、プラハ芸術アカデミー（略称 AMU）世界初のステージデザイン部門の部長となる。

1948～68年　プラハのパフォーミングアーツ、アカデミーシアター学部（現 DAMU）のステージデザインの主幹研究所勤務。（1956年正式な教授となる）最晩年まで教授職を勤めた。

1950年　演出家 Otomar Krejča（1921～2009）との共作が始まる。

1958年　ベルギー・ブリュッセル万博でチェコスロバキア・パビリオン設計企画でグランプリ獲得。

1959年　ブラジル・サンパウロ第2回ビエンナーレでチェコスロバキアの展示ディレクターを勤めゴールドメダルを獲得。この展覧会の企画はその後のモンテビデオ（1960）、ブエノスアイレス（1960）、メキシコシティ（1961）、カラカス（1961）でも再導入された。

同年、　モスクワ・ビエンナーレでボヘミアクリスタルを中心にしたアート・デザイン展を開催。またトロスターのステージデザイン25周年の回顧展開催。

1960年　ブルノの第1回ステージデザイン展に出展。

1963年　イタリア・ネアポリでの第1回ステージデザイン展に出席。

1964年　アートデザイン展『大モラヴィア』企画展示。（オーストリア、スウェーデン、ギリシャ、ドイツ、旧東ドイツ巡回）

同年　ウィーン国際庭園展　一部企画参加。

1965年　ドイツ・ライプチヒにてチェコスロバキアの図書展展示ディレクターを勤める。

1968年　チェコスロバキアを代表するアーティスト『ナショナル・アーティスト』に任命される。

同年　12/14　プラハにて死去（享年63歳）

フランティシェク・トロスターは『光と空間の詩人』と呼ばれたアーティストである。建築から舞台美術、衣装、舞台照明、展示設計、イラスト、絵画、ディレクター、教育者として活躍した。旧チェコスロバキア（以下チェコスロバキアで統一表示）のナ

ショナル・アーティストに任命され、現代チェコ舞台美術の父とも呼ばれる。経歴をみるだけでも実に多才な人物であったことが伺い知れる。彼の作品の数々は修復され、多くはプラハにある国立博物館Narodni Muzeumや国民劇場Narodni Divadlo, DAMUに保存されている。

フランティシェク・トロスターが『現代チェコ舞台美術の父』とも呼ばれるようになる独創的な舞台空間を創造するに至には、チェコ共和国の近代史を少し振り返らなければならない。

地理的にヨーロッパの中心部に位置し、度重なる他民族支配があったが、やがてチェコやスロバキア人による民族復興運動が起こった。18世紀末期から20世紀にかけてのチェコスロバキアの複雑な国政事情や文化的背景の中から民族再生運動が必然的に起こり、その運動には演劇や音楽、人形劇、劇場文化が重要な役割を果し必要不可欠だった。それは他国では見られないチェコスロバキア独特の舞台芸術文化を創ることに繋がって、20世紀前半にはチェコスロバキアの舞台芸術は目覚ましい発展があった。

（※DAMUとはプラハ芸術アカデミー演劇学部の略称）

チェコスロバキア独立後なぜ異例の舞台芸術の発展が続いたのか?

17世紀中期から後期に登場するバロック劇場の舞台装置は平面にパースペクティブの技法を用い絵画に頼る並列式舞台装置（※写真2）、ウィング・ボーダーシステムとも呼ばれる舞台美術を発展させた。舞台そのものの奥行きがあるが、舞台美術としては平面の羅列と言ってよい。

その後、19世紀に入ってフランスで工夫され登場したボックスセットと呼ばれる箱形の写実的、自然主義的な装置などから脱却し、演出家や芸術監督が演目を総合芸術作品にしようとする舞台芸術の動きが始まった。それは19世紀末からの新しい空間演出理念と、電気による照明器具の発明と発展が大きく関わっていたことがあげられる。電気による照明器具が

※写真2　並列式舞台装置

登場するのは1870年代、白熱電球の発明が1878年、蛍光灯の実用化が1938年だった。

19世紀末から20世紀初頭に革新的な舞台美術空間を提唱したのはスイス人のアドルフ・アピア（1863～1926）やイギリス人のゴードン・グレイグ（1872～1966）であった。アピアは建築家、理論家でありながら、舞台美術デザイナー、舞台照明家でもあった。グレイグは俳優として舞台に立ち、演出、舞台美術、照明、衣装、小道具のデザインをする多才な人物で「演劇は芸術である」「劇場芸術の創造者は演出家だ」と唱えた。彼らは演劇改革論者で、光りのあり方の重要性を唱え、それはそのまま『20世紀の演劇』に繋がっていった。つまり20世紀までの演劇は芸術とは認識されていなかった。

※写真3　アピアの舞台美術「オルフェとユーリディス」（1912）

アピアやグレイグの提唱する芸術としての演劇空間や、近隣諸国の前衛的な舞台芸術の影響を強く受けたチェコスロバキアの演出家やアーティストは小劇場から国立劇場まで様々な実験的空間を作り上げ、実際に数々の上演を行った。つまり実験と実践を行える空間と劇場を持っていたと言える。

革新的舞台空間を提唱したアピアやグレイグは実際には自分のデザインした美術や照明で作り上げた上演は極めて少なかったが、チェコスロバキアの舞台美術家が抜きん出たのは、民族再生運動の勢いに乗って独立したチェコスロバキア国家、20世紀初頭の共和国性と、その後の社会主義共和国にあっての劇場運営システムと照明機器や映写機の開発にも大いに関わっていた事があげられる。

哲学者トマーシュ・マサリク（1850～1937）や劇作家ヴァーツラフ・ハヴェル（1936～2011）が大統領になるお国柄、政治家が舞台芸術をサポートして、万国博覧会やトリエンナーレ、ビエンナーレの国際展への出展物として推進したことはチェコスロバキアの舞台芸術を独自の発展に導いた。更にフランティシェク・トロスターやヨセフ・スヴォボダが追いかけた新しい舞台芸術はアクションデザインを中心とした、光と立体感のある空間を求め、更に映像とパフォーマーとのコラボレーションの実験に拍車をかけた。この映像と照明とパフォーマーとの共演は今やプラハの名物となった舞台芸術『Laterna Magika』（意味は「魔法のランタン」）を作り上げていくことに貢献することとなった。

20世紀の巨匠スヴォボダの影に

1967年に第1回のPQが開催され4年毎に世界の舞台美術家や演劇関係者がプラハに集うようになると、最新の舞台芸術の情報が交換される中、スヴォボダの名前は増々世界にとどろき、カリスマ的アーティストとして演劇史に名前を残した。照明器具やスクリーン、幕など数々の開発を行い、スヴォボダ・ライトと呼ばれる照明器具は世界中に普及し、日本の照明家にも良く知られるところだ。しかし、スヴォボダの前にフランティシェク・トロスターと言う欧州各国で活躍する建築家、舞台美術家、教育者が存在していた。1958年のブリュッセル万博のチェコスロバキア展示の中心人物、戦前から活躍するアーティストがフランティシェク・トロスターだった。

けれどもトロスターは第1回PQ開催の翌年、1968年ソ連による軍事介入『プラハの春』民主化の芽を摘まれた悲劇の年末に他界し、その名前はスヴォボダの影にすっかり隠れてしまい、チェコスロバキアの演劇界の記憶の奥深く閉じ込められていた。日本ではほぼ無名の人物だと言ってよい。

近年チェコ本国でトロスターの業績が見直されつつあったところへ、彼の息子Martin Tröstерによって舞台や展示、建築、イラストの数々の作品が再発見された。そして、生誕100周年を記念して2003年にSociety of František Tröster が創設された。トロスターが居たからこそスヴォボダが登場したとも言われる重要人物であった。彼の存在がなければ偉大なるスヴォボダの舞台表現も違ったものになっていたかもしれない。

国際展覧会と万国博覧会　トロスターの取り組み

プラハでの国際舞台美術展覧会、PQ開催に至るまで、今から70年余り前の1936年ミラノ・トリエンナーレ応用芸術部門で、チェコスロバキアの3人の芸術家Vlastislav Hofman（1884～1964、Hofmanは舞台美術家としてよりも、今も人気の高いキュビズム作家として広く知られている）フランティシェク・トロスター、Jan Sládek（1909～?）が主たる賞を獲得し、すでに第2次大戦前には世界が認める高い劇場芸術の土台があった。そして翌年、1937年パリ万博のテーマ『近代生活における芸術とテクノロジー』で、チェコスロバキアの展示が絶賛され成功を納めた。チェコスロバキア建国から20年目のことで、初代大統領マサリクの共和国と呼ばれた20世紀プラハが最も輝いた時期のことだ。残念ながら今回の調査では万博受賞作品の画像は見つけることが出来なかった。

周知のことだが、第2次大戦後は世界中で様々な文化、芸

術が堰を切ったように溢れだした。そのような中、1958年のベルギーで開催されたブリュッセル万博（※写真4,5）ではミラノ・トリエンナーレ（1936年）で活躍した、フランティシェク・トロスターがチェコスロバキア・パビリオンの企画をプロデュースし、国を代表するアーティストとしてトップに立っていた。

その展示演目こそが『LATERNA MAGIKA』と名付けられ（Alfred Radokとスヴォボダによる作品）、パフォーマーと映像によるイリュージョン空間を表現したもので、大成功を納めた。それはチェコスロバキアの十八番（おはこ）として何度となく万博に出展され、1970年の大阪での万博でも上演されている。つまり、『LATERNA MAGIKA』はチェコスロバキアの国家戦略的なアートとして発展を続けた。プラハにあるナショナルシアターの一つ『Laterna magika』の元になったもので、今や『Laterna magika』はその専用劇場と上演手法を指し、現在は様々なタイトルの作品が上演されている。特殊な技術と装置と劇場を必要とするために、万博以外に海外公演を行うこともない。従って、逆にプラハに行ったならばLaterna magika Theatreを体験しなければと、観客を誘っている。昨今増殖中の映像とパフォーマーとのコラボレーションのルーツとも言えるだろう。

1959年のサンパウロ・ビエンナーレでは、ウラジミール・Jindra（?）がパビリオン設計と総合カタログを担当し、トロスターによってデザインされた特別展示『チェコスロバキア1914年～1959年のステージデザインと劇場建築の発展』がゴールドメダルを獲得した。舞台美術家として初めてのゴールドメダル受賞となった。かのブラジルを代表する建築家、オスカー・ニーマイヤー（1907～2012）はその展示を見て、「現代的なステージデザインの始まりだ！」と述べている。この時トロスター55歳、スヴォボダ39歳での参加だった。その後も1961年にスヴォボダ、1963年は日本でも良く知られる人形アニメ作家であるイジー・トルンカ（1912～1969）、1965年Ladislav Vychodil（1920～2005）とVaclav Nyvlt（1930～1999）と3度のビエンナーレの演劇部門の主たる賞をチェコスロバキアのアーティストが総ナメにした。それはあまりに異例なことで他には見られない継続的な成功だった。

1959年の金メダル獲得を機に、サンパウロ・ビエンナーレ主催者側から舞台芸術や劇場部門の国際展をチェコスロバキアで開催するように導きはじめた。そして、チェコスロバキアでも首都プラハで舞台美術と劇場建築を中心とした国際展を開催しようという動きが本格的に起こった。組織、資金調達、イデオロギーと美学など数々の問題を解決させて、サンパウロ・ビエンナーレの制度を取り入れて国際展PQを創設するに至った。それは、プラハの春と呼ばれる自由改革路線が発表され

※写真4　ブリュッセル万博　チェコスロバキアの広報資料

※写真5　ブリュッセル万博　Laterna Magika　ライヴの模様

る前年1967年のことだった。

このように20世紀初頭からのチェコスロバキアの舞台芸術を調査すると、スヴォボダだけでなく戦前から活躍したフランティシェク・トロスターの功績が実に大きいことが解った。スヴォボダ以前にトロスターの存在があったとばかり、2003年Society of František Trösterが設立され、2004年11月プラハにある国立博物館においてシンポジウムが開催された。発表者や参加者はチェコ共和国のみならず、欧米諸国に散らばったトロスターの教え子や研究者が集った。Societyの設立は巨匠スヴォボダが亡くなった翌年のことで、設立の結果トロスターの業績をチェコ共和国のみならず世界的に知らしめることになり、再評価されることとなった。巨匠となったスヴォボダやLodislav Vychodil、Marta Roszkopfova（1947～）、ヤロスラフ・マリナ（1937～2008）、Jan Sládek（1942～）を指導教育したのもトロスター教授だった。

トロスターの多方面に渉る業績の数々を紹介し、彼がその後の舞台芸術に及ぼした影響も考察したい。

変革の20世紀

トロスターが生まれた当時はオーストリア・ハンガリー帝国時代で、当時のヨーロッパは目紛しく変化し帝国は1918年に解体され、そしてチェコスロバキア共和国が建国された。ロシアでは1917年に革命が起こり、その前後から始まっていたロシア・アバンギャルドのムーブメントの中、メイエルホリド（1874～1940）は演劇史に残る演出の『堂々たるコキュ』（1922）を上演した。その舞台装置をデザインしたロシアの女流画家であり美術家であったリュボーフィ・ポポーワ（1989～1924）の舞台装置は新しい演劇運動の標準句（ロクス・クラシクス）になって、演劇における舞台美術の役割と本質を根本的に変革する動きの一つになり演劇の構成主義と呼ばれた。余談だが、この『堂々たるコキュ』のデザイン画は今やポストカードとなってロシアで販売されて、ロシア・アバンギャルドのエポック・アイテムになっている。

オーストリア・ハンガリー帝国時代のベルリンやウィーンの劇場では、当時の演劇界で皇帝と呼ばれたマックス・ラインハルト（1873～1943）が言語と音楽、振り付け、舞台美術の総ての要素を調和させたステージング・テクニックでドイツの劇場に新しい次元をもたらしていた。前述した演劇改革論者とも言えるアピアやグレイグは舞台上の演出の必要性と舞台装置の改革と舞台照明、光のあり方の重要性を提唱した。彼らが唱えた舞台を実現させたのがラインハルトやポーランドのレオン・シラー（1887～1954）だった。19世紀末の電気の発明により照明器具が改善、発達することによって、演出理念や空間表現も新しい転換を迎えた。東欧の舞台は世界演劇の実験室のような展開をみせ、舞台芸術の前衛最前線となっていた。

トロスターの舞台活動

トロスターはまさに変革の時代に学び、ハイスクール時代に早くも地元のアマチュア劇団シアターギルド・ハーレクに関わり舞台デザインを行っている。彼は視覚芸術に興味を持ち、プラハで建築を学んでいる時は雑誌『Trn』で政治風刺漫画を描くイラストレーターとしても活躍していた。また興味深いことに、トロスターは大学院卒業後に都市プランナーとしてパリの建築会社に勤め、1933年に20世紀を代表する建築家の一人であるル・コルビジェのアルジェ・プロジェクトに参加していた。東欧で学んだ者にとってはアルジェの街や建築様式はさぞかし新鮮に映ったことだろう。だが、翌年にはスロバキアに戻り教職につく傍、本格的にスロバキア国立劇場（ブラチスラバ）、チェコ国立劇場（プラハ）、その他の地方劇場で活動を始める。

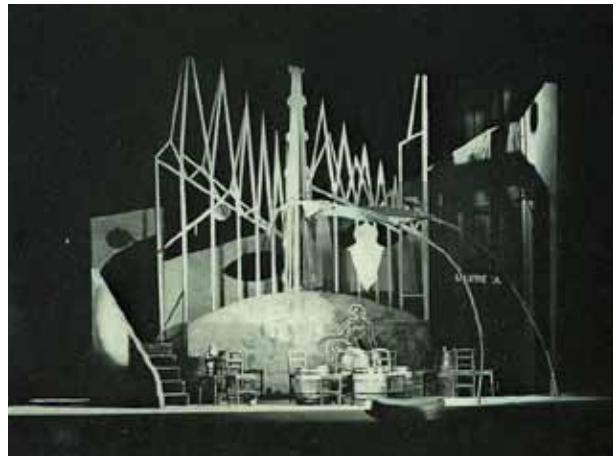
Society of František Trösterの記録によると皇帝と呼ばれたドイツのラインハルトやレオポルド・イェスナー（1878～1945）、エルヴィン・ピスカートル（1893～1966）、ベルトルト・ブレヒト（1898～1956）などの演劇創作理論にもトロスターは触れていた。1933年にはモスコフスイキー演劇祭を訪問し、タイーロフ（1885-1950）などの劇場上演を観劇して、ロシア・アバンギャルドの名残りと演劇の構成主義を体験していた。

※写真6　イェスナー演出　「リチャードⅢ」（1919～1920）ベルリン

彼は1934年から本格的に舞台美術に取り組み始め、1934年から4年に渉り、演出家Viktorem Šulcem（1897～1945）と舞台作品を制作した。初めての上演はスロバキア国立劇場（略称SND）での演出の『Periphery』だった。Viktorem Šulcemはスロバキアのオペラ演出に貢献した人物で、有名なドイツの表現主義の演出家レオポルド・イェスナーの教え子でもあった。Viktorem Šulcemはトロスターと出会い、イェスナーの影響力を放棄し、2人の創作は現代社会的志向隠喩とダイナミックなオペラ制作に挑んだ。視覚的に構成主義のヴィジョンを持って、シンプルな空間に幕の使い方や素材を研究し、照明を効果的に使用するための造形的な舞台美術を作る実験をためらわなかった。照明器具やプロジェクターを駆使して、それまでにないユニークなスタイル合成を探り、前衛的な舞台空間創作を提案しつづけた。つまり、過去の絵画に頼る舞台美術やドイツ表現主義的（※写真6）な空間から離れ、立体的構成と多彩な幕の使用と新しい照明表現によって、舞台上の空間は多様に表現された。

Šulcemとの上演作品には『冬物語』1935（※写真7）『ホフマン物語』1935（※写真8）『フェデリオ』1936、『タルチェフ』『ホワイト・ペスト』などであった。第2次大戦前にすでにウィーンやベルリンなど近隣諸国でも数多く創作活動を行い、高い評価を得ていた。

※写真7　「冬物語」（1935）　デザイン画



※写真8　「ホフマン物語」（1935）

盟友である演出家Jiřím Frejkou（※写真9次頁）との取り組みはトロスターの舞台美術活動の重要な地位を占めている。新しい舞台空間、空間演出を表現するには共に理解し理想を追う演出家との出会いが必要で、トロスターにとってはJiřím Frejkouが最良のパートナーとなった。2人のコラボレーション第1作は1935年プラハ国立劇場で伝説的な公演と

※写真9　演出家Jiřím Frejkouとトロスター

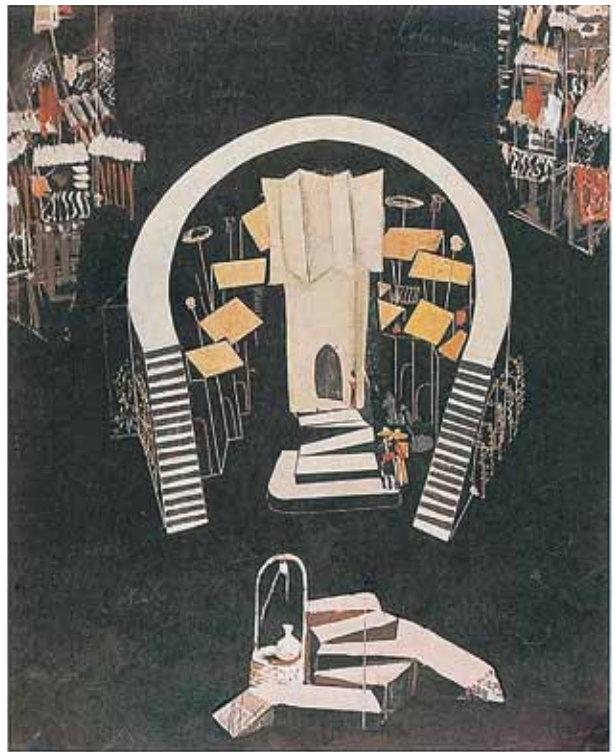
なったスペインのロペ・デ・ベガの戯曲『FUENTE OVEJUNA』（※下記写真10,11）だった。この作品は20世紀のチェコスロヴァキアで重要な舞台作品の一つとなった。その他、数え切れないほどの2人の舞台創作作品があるが、第2次大戦前の代表作に以下のような作品がある。

シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』1936（※写真12,13,14次頁）ゴーゴリの『検察官』1936（※写真15次々頁）『ボリス・ゴドゥノフ』1937『お気に召すまま』1937、『スペルバウンドライフ』1937、『ロミオ＆ジュリエット』1937（※写真16,17次々頁）、『Falkenstejn』1938などである。

第二次大戦の間にトロスターは他の劇場でFrejkou以外の演出家とも仕事をしている。1942年には『サティロスと僕と空と麦畑』演出Václav Kašlík（1917- 1989）のバレエ作品をデザインしたが、彼らの考えは反ファシスト解釈として職業当局から上演禁止令が出された。1944年遂にトロスターは職業当局によって『芸術活動縮退者』に指名され、劇場からの仕事を離れることを余儀なくされた上、軍需産業の強制労働を強いられた。彼にとってはもっとも厳しい時期であったが、実はこの間も舞台美術デザインを行い、トロスターの代わりに画家F・ティシーとJ・ブローチらがデザイン画にサインをしていた事が判っている。政変が変わる中でも信念を貫いて活動していたことが窺える。

トロスターは戦後自由に芸術活動出来る身になってから、シニックデザイン、つまり演劇の一連のシーンを考える舞台美術の仕事を中心にした。トロスターやスヴォボダ、Jan Sládekらの舞台美術というのは今日の日本の事情とちがい、舞台装置、舞

※写真10　「FUENTE OVEJUNA」（1935）　上演写真



※写真11　「FUENTE OVEJUNA」（1935）　デザイン画

台衣装、舞台照明の総てを提案し、照明機器や映像機器、スクリーンや幕なども開発するものだった。またトロスターは舞台美術の他に劇場設計や展示技術でも活躍し、劇場設計コンペティションの審査員なども多数勤めていた。

大戦後は再びJiřím Frejkouと意欲的にチェコスロバキアはもちろん国内外の劇場で、戦時中の禁じられた考えを元に芸術活動を再開した。その他にトロスターは映画やテレビの美術監督として大戦前の1939年にJaromir.Pleskot監督の仕事に関わっている。1949年の映画『Divá Bára』なども手がけた。彼の400以上のデザインの中でも映画の仕事は、その後1958年ブリュッセル万博と1964年に組織されたデザインアート展『大モラヴィア』におけるチェコスロバキアのパビリオンの企画に起因したと言う。そして、それが『Laterna magika』に繋がり、スヴォボダに引き継がれた。

1950年にはOtomar Krejča（1921- 2009）とのコラボレーションが始まる。Otomar Krejčaはチェコスロバキアの20世紀を代表する伝説的な演出家であり、俳優でもあった。

トロスターが戦後手がけた主な演目を上げておこう。

『病は気から』1946、『ヴェネチア』1946、『ナビゲーターテセウス』1946、『カーチャ・カバノヴァー』1947、『夏の夜の夢』1947（※写真18次頁）、『ボリスゴドゥノフ』1949、『ウィンザーの陽気な女房たち』1949『シラノ・ド・ベルジュラック』1949『オネーギン』1949『ルサルカ』1950『フィガロの結婚』1950、『オテロ』1951『階段でかくれんぼ』1952、『さまよえるオランダ人』1953『ドン・カルロ』1954『カルメン』1954『フィガロの結婚』1955『桜の園』1955『マクロポリス』1956『アイーダ』1957『検察官』1958『ドン・ジョバンニ』1961『スペードの女王』1963『利口な女狐』1965『カーチャ・カバノヴァー』1965『桜の園』1967『カーチャ・カバノヴァー』1968

トロスターの舞台美術の仕事は主にヴィノフラディ劇場での上演だったが、上記の作品は海外公演も多く、ミラノ・スカラ座やオーストリア、ノルウェーのオスロ、トルコのアンカラやアルゼンチンのテアトロ・コロンなど晩年は海外公演を多数こなした。

※写真12　「ジュリアス・シーザー」（1936）

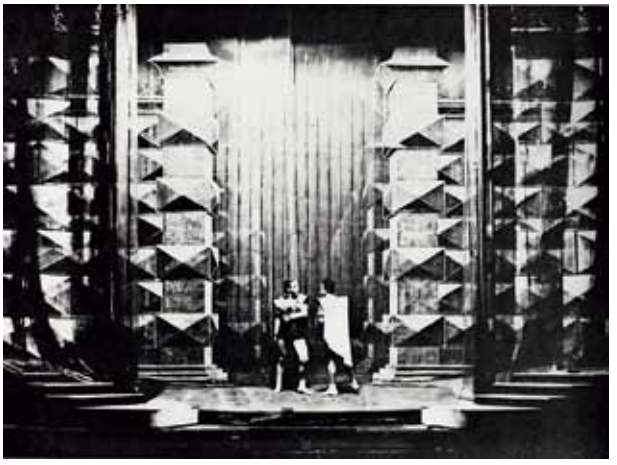
※写真13　「ジュリアス・シーザー」（1936）

※写真14　「ジュリアス・シーザー」（1936）デザイン画

※写真15 「検察官」（1936）模型

※写真16 「ロミオとジュリエット」（1937）

※写真17 「ロミオとジュリエット」（1937） 墓場のシーン



※写真18 「夏の夜の夢」（1947）

プラハ芸術アカデミー　演劇学部での教育（通称DAMU）

トロスター自身は元々建築を専攻し都市計画にも関わったが、彼の行った仕事の中でも特筆すべきものとして『プラハ芸術アカデミー』演劇学部創設（現･DAMU）に尽力したことだ。彼は世界で最も早い時期に舞台美術を専門的に学ぶ学科を創設したメンバーの一人で、Jiřím Frejkouと共に高いプロ意識と指導の才能を持って、前衛的なシニックデザイン、舞台美術を多面的に教育した。そのカリキュラムは多岐にわたり、舞台芸術の演出、舞台装置、衣装、舞台の形、スタニラフスキーシステム、ディレクターの基礎、現代劇場セミナー、戯曲の分析、舞台芸術の歴史、チェコスロバキアの劇場、一般的な歴史、美学、その他に当時の時代背景としてマルクス･レーニン主義や選択科目としてロシア語などがあった。

トロスターがDAMUで教鞭を取る時にはすでに教師として10年のキャリアを積んでいたが、その指導スタイルは独特で多くの学生に影響を与えた。演劇テキストやステージング･コンセプトに焦点を当て、新しい舞台芸術パフォーマンスの理念や後の世代の育成とその継続のシステム確立に成功する。舞台芸術学科の彼の教育活動の中から多数の重要なデザイナーが生まれた。そして、最も早い時期に舞台美術教育に取り組

んだことは、その後に開設される他国の演劇教育制度や舞台美術教育に影響を与え、他の芸術分野で活躍する多くのアーティストにもそれは及んだ。

教え子達は『プラハの春』の事件もあり、各地各国に散らばった。その事がDAMUやトロスターの教育理念を広く伝えることにもなった。20世紀の演劇界、チェコで最も有名なヨセフ・スヴォボダやその後を次ぐ舞台美術家、Ladislav Vychodil、Marta Roszkopfovaとヤロスラフ・マリナらが育った。因みにヤロスラフ・マリナは日本に招聘されたことがあり、その際、大阪芸術大学にも立ち寄ってもらい筆者も面談させて頂いた。

教え子の多くは今もヨーロッパや北米で活躍し、ステージデザインを教える立場に立つ者も多く、Society of František Tröster のシンポジウムでは各地に散らばった教え子が集い、トロスターの人柄と業績をあらためて報告した。その人柄はマスコミの表立った所にはめったに顔を出さなかったが、教え子の間ではMr.Professorの愛称で呼ばれ大変親しまれる人物だったことが報告されている。

まとめ

今回の調査は実に興味深いものだった。前々から何故チェコに優れた舞台芸術家が多く現れたのか？疑問を持ちつづけていた。トロスターが第1回PQ開催直後に他界したこと、情報がスピーディになる世の中、スヴォボダの活躍は増々世界中を駆け巡った。やがてトロスターの存在はすっかり忘れ去られたようだったが、実は彼もまたPQ開設に繋がるキーパーソンでもあった。今日の映像とパフォーマンスの元祖とも言える舞台芸術『Laterna Magika』のルーツにもトロスターの存在があった。

独創的な視点の生みの親として、1930年代の空間演出で新しいスタイルを整えたことは、その後のチェコスロバキアの舞台芸術に多大な影響を与えた。20世紀前半から中期にかけての前衛的空間演出の基礎を築いたチェコスロバキアのセノグラファーズのリーダーの一人だったことが今回の調査で判った。トロスターの先輩格にはHofmanやBedřich Feuerstein（1892～1936）、Antonin Heythum（1901～1954）、František Muzika（1900～1974）らが居たが、トロスターはそれまでの舞台美術家とは違った。彼は20世紀のムーブメントに乗って、より詩的な空間を提案し、舞台での運動学やマテリアルや照明に投影機と新しいテクノロジーを追求したアーティストだった。

スヴォボダの業績ばかりが目立つ20世紀のチェコの演劇界だったが、演劇は一人のクリエーターで生み出される芸術でないことは周知のことだ。スヴォボダには共感しあえる演出家アルフレッド・ラドック（1914～1976）が居たし、トロスターにはJiřím FrejkouやOtomar Krejčaと言う優れた演出家のパートナーが存在した。加えて、多様に実験出来る劇場とスタッフ、照明と映像の展開に対応してくれる俳優やパフォーマーと、何より育てる観客があったと言えよう。それは幾多の動乱を乗り越え、劇場文化が国民のアイデンティティを支えたというチェコやスロバキアならではの歴史背景を劇場関係者も観客も充分に承知で、誇り高く持っているからだろう。

素晴らしい舞台芸術を育て継続させることは容易ではない。チェコスロバキアの20世紀の成功はスタッフ、観客、それを支えた政治体制にあった。1989年ビロード革命、1993年ビロード離婚と呼ばれたチェコ共和国とスロバキア共和国の連邦制の分離、輝かしい20世紀のチェコスロバキアの舞台芸術は新たな時代を迎えていた。幾多の困難を乗り越えてプラハ・カドリエンナーレは、舞台美術や劇場建築を中心とした展覧会から始まったが、年々その領域を広めて舞台芸術全体を包括し始めている。前回のPQではナショナルブースは一般的な展示を止めて、新たな取り組みをした国が多数現れた。日本のブースも舞台美術家達によるパフォーマンスを展開した。2015年13回目の開催準備は静かに始まっているが、PQの発展と共にトロスターの残したものについても今後も研究調査を続けたいと思う。

参考文献

『A MIRROR OF WORLD THEARE』著Vera Ptackova
THEATRE INSTITUTE PRAGUE出版　1995年
『František Tröster』　著 Jiri Hilmera　Divadelni ustav Praha 出 版
1989年
『LaTERNa MaGIKa or A THEaTRE of MIRaCLES』　著 Vaclav
Janecek-　Stepan Kubista Laterna magika出版 2006年
『ロシア･アヴァンギャルド 』著ステファニー･バロン、モーリス･タックマン
リブロポート出版　1982年
『アドルフ･アピア』著 遠山静雄　相模書房　1977年
『中欧　ポーランド･チェコ･スロバキア･ハンガリー』　沼野充義　監修
新潮社1996年
『Jozef Svoboda 』Union Theatres of Europe出版 1999年
『ゴードン･グレイグ』　著エドワード･グレイグ / 佐藤正紀 訳　平凡社
1996年
『LIGHT FANTASTIC』著Max Keller　Prestel Verlag出版 1999年
『アヴァンギャルド宣言』　井口壽乃、圀府寺司　編　三元社 2005年
『Rossian and Soviet Theatre』　著 Konstatin Rudnitsky
Thames&Hudson　2000年
『Theatre in Revolution Russian Avant-Garde Stage Desien 1913-1935』
Thames&Hudson　1991年
『劇場の構図』著 清水裕之 鹿島出版会　1985年版
『Leading Creators of Twentieth-Czech Theatre』 著　Jarka M.Burian
Routledge 2002年
František Tröster / Artist of Light and Space
他